

創建

そうこん

2018・12・12 VOL.53 NO.3 (通巻169号)

巻頭言：廣田篤彦・1
 卒業生の活躍紹介・2～3
 大学院特別講義(本杉省三先生)・4
 大学院特別講義(小林淳先生)・5
 ネットワークOB&OG②：藤谷英孝・6
 J I A東北建築学生賞最優秀賞受賞他・7
 現場見学報告／在校生の活躍・8～9
 工学部学術研究報告会／大学院研究生生活・10
 発表論文／学術論文／教室ニュース・11～12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

神奈川県と千葉県は、かつては「近くて遠い」存在であったが、成田空港の開港(1978年)や東京ディズニーランドの開園(1983年)、東京湾アクアラインの開通(1997年)などにより、以前より身近になっている。また、私が生産工学部に入学した頃は、既に横須賀線と総武線が相互直通運転を開始しており、そうしたアクセスの向上が、当時、下宿ではなく通学を選択した(させられた)大きな理由の一つでもあった。

とはいえ、バスや電車を乗り継ぐと片道2時間……。もはやこれはもう、ちょっとした小旅行の範疇である。考えてみれば、神奈川県から、東京都を通り越して千葉県まで通うのであるから、結構な大事である。例えば東北新幹線の場合、東京から2時間乗車すると岩手県まで行くことができるし、上越新幹線なら日本海に辿り着くことまでできてしまうことを鑑みれば、交通網の発達が、我々の生活に大きく影響を及ぼしていることを改めて実感する。

ところで、我が家から見て、たいそうな遠隔地に立地していた母校であったが、環境はなかなか良いものであった。決して都会ではないものの、徒歩圏には東邦大学、順天堂大学キャンパスもあり(その後移転)、ちょっとした学園都市でもあった。特に隣接する東邦大学は、薬学部ということもあって女子学生の割合が高いことから、昼食時はよく興味本位で「遠征」したことを覚えている。

一方、学内の環境はどうかと言えば、主に一年生を対象とした一般教養用の実習校舎が新設されたこともあり、特に新生入生にとっての第一印象は良いものであった。また、高学年次用の津田沼校舎に関しても、キャンパス全体の真新しさはないものの、施設面ではかなり充実していたように思われた。例えば、製図棟内に配された製図室は各研究室の隣にあり、夜間や授業のない日は自由に使うことができた。仮に1研究室あたり15人程度の卒研生がいたとし

ても、各部屋35台?を設えた空間は、中々贅沢な環境であった。当時はまだ手書きの時代であったため、いわゆる切り貼りがスタンダードなプレゼンテーションであったが、4年生になると、コンペや卒業設計などで、エアブラシ(電動の霧吹きのようなもの)なるものを屈指するのが最も高度な技法であるとされた。エアブラシによるプレゼンは綺麗で最強であったが、手間がかかるのと作業スペースの確保が最大のネックだ。色がはみ出さないようにマスキングをしながら着色するのであるが、この繰り返しが大変な手間で、何度切れかかったことか(笑)……。一方、当時大流行した切り貼りは、今となつては古典的な技法ではあるが、低学年次のプレゼンとして今も利用される。当時は、図面を貼った台紙をA1

環境を考える

教授 廣田 篤彦

判の色紙へ大判コピーを掛けることから、その経費は学生にとって大変な負担であったが(紙代を含めて1枚千円程度)、近隣の画材店は、当時3千万円?もする大型複写機をこぞって導入し、それでも元が取れたというから驚きだ。いずれにしても一人当たりの作業スペースは広いに越したことはないし、キャンパス前や最寄り駅に画材店があるのも、特にデザイン系の学生にとっては恵まれた環境であったと言えるだろう。

そうした「バブル期」を終え、その後徐々にデジタル化へと移行し、今では個人のPCで図面を描く時代へと様変わりした。PCすら普及していなかった当時からすれば、考えられないほどの進化と言えよう。しかしながら、何から何まで全てが新しくなったかというとは実はそうでもない。低学年次の製図の授業は手書

きから始めるし、何より、建築士の実技試験は今も手書きである。近い将来、実技試験にもデジタル化の波が押し寄せると言われているが、紙やペンがタブレットやマウスに「征圧」される時代が迫りつつある。

環境の変化は、何も建築に限ったことではなく、日常生活の中でも劇的に変わったことは結構ある。かつては、まさか電話を持ち歩く時代が来るとは想像もしていなかったし、電子マネーや仮想通貨まで登場するなど、利便性や快適性の向上は目を見張るものがあるが、一方で、それらを逆手にとる犯罪や事故も高度化・複雑化しており、より緻密な対応も急務となっている。

ところで、ここ数年、気象に関わる環境が大きく変化していることをお気づきだろうか。ニュースや天気予報で、「数十年に一度の」といったフレーズを幾度となく耳にする。「数十年に一度」、あるいは「ただちに命を守る準備を」というレベルの災害が毎年のように襲来する、そんな時代に突入しつつある。路上に水が溢れるほどの豪雨や、風速60m超の暴風、街中を縦断する竜巻など、かつてはあまり目にする事のなかった気象災害も格段に増えてきている。気象災害の多くは、地球温暖化やヒートアイランドが起因とされており、進歩した都市活動の対価として、我々が対応していかなければならない課題も、より深刻になってきている。

2011年、東北地方を中心に大惨事を巻き起こした東日本大震災の発生は、津波や原発の恐ろしさを改めて認識させられたが、実は同規模程度の地震が30～40年おきに同地域付近で起こっている。南海・東南海地震や首都直下地震の発生も切迫していると言われており、もしかすると、我々を取り巻く環境は、むしろ益々悪化しているとも言えなくない。一口に環境といっても、様々なシチュエーションが想定されるが、是非この機会に、環境に対してより関心を持っていただければ幸いである。

卒業生の活躍紹介

総合建設業・研究職

「ゼネコンにおける研究開発」

小林 利 充

私が建築を志したのは、幼少期に遊んでいた「ブロック」と、高校時代に見たトレンドドラマの建築士への憧れがきっかけでした。大学入学後、研究室を選ぶ際には、建築を志した動機とは一変し、苦しくても最先端の研究をしてみたいとの思いで、大濱・出村研究室の門を叩きました。これがきっかけで、私のコンクリート人生が始まり、28年も続いています。大学院卒業後は、2つのゼネコンに勤務しましたが、いずれも技術研究所に配属され、コンクリート関連の研究開発に従事しました。ゼネコンの研究開発は、①高性能高品質な工法・材料の開発、②工期短縮、③低コストを実現させ、いかに事業に貢献できるかが常に問われます。私は数年前から、低炭素型コンクリートと言う新たなカテゴリーの研究開発を行っています。課題解決に向けて、文献調査やメーカーヒアリングを行い、可能性のある材料を入手して日々実験の連続です。実験は基礎的性状の確認に留まらず、実際のレディーミクストコンクリート工場において製造性の確認や、実大規模の施工実験、構造部材としての性能確認など、様々な観点から検討を行います。さらに、目標性能を達成できても、法適合性、コストおよび発注者・設計者の了解が得られなければ現場適用ができません。したがって、限られた期間の中で、様々な検討・評価・判断をする日々が続きます。研究開発は、産みの苦しさに似ていると思いますが、開発中（生まれる前）は、幾多の壁にぶつかり苦悩の連続です。ただし、現場に適用した時（生まれたあと）には、何事にも代えがたい達成感があります。前述した研究開発成果は、数多くの現場に適用され、得られた成果によって日本建築学会賞などを受賞することができ、私の研究者人生の中で最高の出来事でした。大学院での研究が企業の研究に直結することは稀だと思います。ただし、研究室で学んだ情報収集の大切さ、実験に対する取り組み方や成果のまとめ方は、どのような研究開発でも活かすことができ、今の自分自身の礎だと思います。

卒業研究生や大学院生の皆さんが、専門知識を深堀りすることや他分野の知識を幅広く学ぶことで見識を広げることは非常に大切です。ただし、研究開発は1人ではできません。そのため、知識を吸収するだけでなく、幅広い年齢層の方とのコミュニケーションを通じて、相手の話を受け入れつつ、自分の意思を伝えながら課題解決に導く能力やチーム力を身に付けることも非常に大切なことだと思います。今回の記事がゼネコンの研究開発を知って頂くきっかけになれば幸いです。

(こばやし としみつ)

略歴

1997年 博士後期課程建築学専攻修了
(大濱・出村研究室)1997年 西松建設株式会社
入社2009年 株式会社大林組
入社現職場である
技術研究所の外観

コンストラクションマネジメント職

「マネジメントと取組姿勢」

杉 本 昇 平



現在、CM（コンストラクション・マネジメント）業務を主に仕事を行っています。CM業務とは、国交省HPでは「発注者の補助者・代行者であるCMr（コンストラクション・マネージャー）が、技術的な中立性を保ちつつ発注者の側に立って、設計の検討や工事発注方式の検討、工程管理、コスト管理等の各種マネジメント業務の全部又は一部を行うもの。」と記載されています。

言い換えると、事業主（発注者・クライアント）の要望を反映させたプロジェクトを実現すべく、事業主側に立ち、課題や手法を整理し、事業主・設計者・施工者等といった関係者の皆さんと協同し、品質・コスト・スケジュール等の最適化を進める立場となります。

様々な関係者と協議・調整を行うため、CMrには様々な知識が求められます。

建設プロジェクトは、企画、土地選定、設計者・施工者選定、設計、施工、竣工、運用と進んでいきますが、CMrが参画するタイミングは様々であり、業務の内容もかわってきます。例えば、企画段階から参画する場合、方針検討・予算策定・土地取得（最適な土地を複数から選定する等）・事業主の要望整理・諸条件整理等（ユーザーターゲット設定等）といったサポートを行います。プロジェクト毎で状況が異なるため、プロジェクトに参画した時点で、条件や情報を速やかに収集・整理し、事業主の目的を認識した上で、最適な手法・進め方を設定し、マネジメントを行っています。

非常に高度なことを求められていると感じますが、大学時代、先生方からご教授頂いた「建築学科の学生は、色々なことに興味を持ち、様々な活動を行うことが必要です。」という教えに通じるものがあります。私自身、(株)レーモンド設計事務所で経験させて頂いた設計業務等や、日建設計コンストラクション・マネジメント(株)で取組んでいる多様な業務経験を基に、事業主が求めることや不安と感じられている項目を察知し、整理・解決・調整を行っています。

総じて言えることは、何事にも真摯に取り組む姿勢、新しい事・知らない事に恐れずに取り組む姿勢が必要ということです。時に難しい局面や初めての分野に取り組むことがあります。関係者とコミュニケーションをとり、プロジェクトを実現していくことに非常にやりがいを感じています。

(すぎもと しょうへい)

略歴

2007年 博士前期課程建築学専攻修了（土方研究室）

2007年 株式会社レーモンド設計事務所 入所

2013年 日建設計コンストラクション・マネジメント
株式会社 入社

不動産業

「ようやく見つけた

私の仕事と働き方」

岡田 博美



新入社員として入社して早十数年、入社当時はこんなにも長く今の会社に勤めるとは想像もしていませんでした。また、建築の仕事こそ希望していたものの、現在の業務を担うなど、予想もしていませんでした。

私が入社した当時は、新入社員はマンション営業からスタートするのが一般的で、私も2年程の経験を積みました。しかし、建築の分野に携わりたいと考えていたこともあって、正直、与えられた業務に向き合うことが出来ませんでした。それから程なくして、自分の希望が徐々に叶うようになり、本社の管理部門を経て、新築現場の施工管理、モデルルームの企画へと次々に配属が変わりました。それは、元々当社がジョブローテーションを敷いていたこともあったためです。このことは、就活中にも、メリットと考えていた点でした。しかし、様々な業務を経験できたことこそ希望通りでしたが、その一方で、配属が変わる間も、それが本当に自分がやりたい仕事なのか、自問自答することがありました。

そうこうしている間に、辿り着いたのが、現在の所属部署である大規模修繕工事の施工管理部門でした。初めは会社の情勢が変化していく中での出向ということもあり、転籍を率直に受け入れる事が出来ませんでした。が、いざやってみると、働き方に自由度があり、何でも自分次第で工夫して働けることが分かり、本当の意味での「私の仕事」を見つけることが出来ました。それは、10年というこれまでのキャリアがそうさせたのかも知れませんが、働き方改革に沸き立つ社会情勢がそうさせたのかも知れません。とにかく当初は全く興味を持たなかった仕事でも、やってみると案外自分にはまっているのかも、と思うようになったのです。

考えてみれば、卒業の際に教授から贈られたメッセージにも、今回の事を示唆する内容が書かれていたことに今更ながら気付かされました。それは、「これまでの固定観念を無くし、自分の殻を破れ」という内容でした。そうすれば、もっと広い世界（視野）に辿り着けるということだったのです。ですから学生の皆さんには、今自分が進んでいる道が正しいのか分らずとも、自らの思うままに、めげずに突き進んでもらいたいと思います。「先生、私は今、ようやくその言葉に辿り着けましたよ!」と言いたい気持ちで一杯です。(おかだ ひろみ)

略歴

2007年 建築学科卒業（浦部研究室）
2007年 株式会社大京入社
2015年 株式会社大京穴吹建設東日本施工管理部出向



大規模修繕工事中のマンション改修現場にて、
居住者様へ色見本を提示しているところ

公務員・行政職

「行政職のまちづくり」

矢 吹 ま り

郡山市職員として勤めて8年目になりました。以前は住宅関係の民間企業に勤務していましたが、市の職員としてまちのために働きたいと思い、前職を退職しました。初めて職員採用試験を受験した際は、建築職と行政職のどちらで受験するか、非常に悩みました。女性が長く働く場合は行政職の方が良い、という話を耳にして（もちろん建築職でも多くの女性が活躍しています）、当時ユニバーサルデザインに興味があり行政職を志望しました。

入庁して初めて配属されたのは国民健康保険課という、建築とは直接関係のない職場でしたが、そこで窓口対応の仕方や、自治体の仕事の流れなど、多くの事を学ぶことができました。その後、都市政策課に異動、中心市街地の活性化等を担当し5年目となりました。

「まちの課題」を考えたときに、「中心市街地の活性化」は必ず出てくるワードです。それだけ皆さんの関心が高く、良くなってほしい、という思いが強い、重要課題だと感じています。昨年は、主に中心市街地活性化基本計画を策定するための基本的なデータ分析、すなわち郡山市の人口や鉄道利用者の推移、郡山駅周辺の地価の推移や商業活動の分析等を行いました。市民をはじめ様々な人々が今後必要に応じて参照するデータとなるため、常に分かりやすい資料作成を心掛けています。

今年は、郡山市内の空き店舗をリノベーションしている方を講師にお招きして、市民対象の「リノベーションまちづくり勉強会」を開催しました。リノベーションによるまちづくりは全国で展開されていますが、郡山市ではまだまだ事例が少ないため、これからリノベーションを考えている方を対象に、実際の工事現場を見ながらお話を聞く機会を設けました。事前の準備や講師の先生との打合せ、参加者の募集等、忙しい中でも楽しく、やりがいを感じて仕事をしています。建築学科を卒業したから建築職でなければならないということではなく、行政職だからできるまちづくりの仕事も非常に多くあります。最後に、私自身もそうですが、周囲にも民間企業から公務員に転職した方が多くいます。どんな仕事も誰かの役に立っています。これから就職活動をされる方は視野を広く持ち、様々な経験を積んでいただければと思います。

(やぶき まり)

略歴

2005年 建築学科卒業（若井研究室）
2011年 郡山市役所入庁



リノベーションまちづくり勉強会 現地視察

大学院特別講義聴講報告

「劇場空間を考える楽しみ」(本杉省三先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 藤野純也

平成30年6月29日(金)、70号館7013教室にて、「劇場空間を考える楽しみ」と題して、本杉省三先生(日本大学理工学部建築学科特任教授)による大学院特別講義が開催された。その内容は私自身の研究テーマとも関係し、非常に興味深いものであった。

1. 本杉先生が考える建築について

序盤の内容では、丹下健三が設計した有名な国立代々木第一体育館の構造を担当した坪井善勝の言葉「建築の美しさというのは合理性のそばにある」が印象に残った。構造家が、建築において合理性を追求する姿は想像に難くないが、「そば」という言葉に深い意味があると。本杉先生曰く、京都知恩院御影堂の修繕の際に見た屋根裏も「合理的に思考しなくてはならないが、合理性だけでは建築は成り立たないもの」という。先生はそのようなところに、建築に託されているテーマが隠れていると感じておられ、聴講学生には、「そう簡単に見つかり気付いたりするものではないと思うが、自分なりの建築をつくるうえで重要な視点を見つけ出してもらいたい」と述べられた。

私は自身の研究や研究室で携わっているプロジェクトで、山間地域に現存する農村舞台を扱っている。対象とする地域は、少子高齢化が深刻であり、人口も減少の一途をたどっているが、その舞台で行われるイベントが活気や地域住民に生きがいを与えていることもある。即ち、特に目立たない地味なイベントであっても、地域の魅力やコミュニティの醸成に役立っていることから、採算や目に見える効果だけではない、「合理的ではないが意味のあるもの」になっているのではないかと考えさせられた。

2. 印象に残った劇場建築について

次に、先生の今に至られる転機の一つであろう、ベルリン留学時に学ばれた劇場建築のお話があり、中でもシャウビューネ劇場が印象に残った。それは、外観を残したまま映画館であった中を改造した外観保存建築物である。固定した舞台も客席もなく、公演の度にその内容に合わせて舞台・客席をつくるという。私は、戦災で破壊された外観を、市民たちの強い思い入れによって、再びオリジナルに戻すという保存意識と、中身は型にはまらず究極の自由度を獲得するという新しさを求める姿勢に刺激を受けた。同時に、私が携わっている先に述べた農村舞台も、明治時代に一度焼失し、後に再建されている。そして現在、昔からの伝統を引き継ぎつつ、新しいイベントや空間演出を模索している。建築物としての価値や規模は違うかも知れないが、ここにも何か建築に

とっての普遍的なテーマがあるように感じられた。

3. 劇場建築にとっての一番大事な「仕上げ」

その後のお話では、先生が計画・設計に関わられた数多くの劇場建築を通して実感されたことをご教授頂いた。その内容は多岐に及んでいたが、特に「場の魅力をどうやって建築的につくり出すか」しかも「それを仕上げるのに一番大事なのが人である」という言葉がとても印象に残った。建築はハコをつくる行為だが、その中で動く人・座る人・滞在する人なども含め(想定)して魅力的な場・空間として仕上げるのが重要であると。

それを想定できるヒントは、類似するような様々な場所に訪れた時に、目に入る事実だけに留まらず、そういった空間を創造する目線で記憶・分析できるかということ、研究と計画・設計をつなげられる、とても大事な内容を含んでいたように思う。私も、様々な芝居小屋や農村舞台に行った時に、そう言った目線で見る事ができていただろうか。

4. 最後に

私自身が、大学院生として研究を行い、またプロジェクトに携わる中では、時間的な制約もあり、現在までの延長線上にある分析・作業を無難にこなすことを目的化してしまいがちである。今回の先生の講義の内容は、勿論レベルは違うけれども自分が行っている内容と類似する内容も多く、自分が日常行っていることを立ち止まって振り返る良い機会であった。

先生の穏やかな語り口もあって、様々なことを思考しながら聴講でき、私にとってはとても貴重な特別講義であった。



大型スクリーンを直接指しながら、
内容の一つずつ丁寧に解説される本杉先生

大学院特別講義聴講報告

「建築と構造技術－構造技術者の役割と責任－」(小林 淳先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 黒田 啓太

平成30年11月16日(金)、ハットNEの3階AV講義室にて、「建築と構造－構造技術者の役割と責任－」と題して、小林淳先生(秋田県立大学名誉教授)による大学院特別講義が開催された。小林淳先生は鉄筋コンクリート(以下、RC)構造の専門家であり、RC構造に関する最新技術の紹介から、建築の歴史や構造技術者の役割に至るまで幅広い内容について講演を頂いた。本稿では、その概要について紹介する。

1. 建築構造技術の歴史と発展

はじめに、建築構造技術の歴史と発展について述べられた。私たちが学んでいる建築構造力学は、およそ3世紀前に確立されたものであり、比較的歴史は浅い。しかしながら、紀元前から建てられている建物は、今でも存在しており、そこには経験的な力学が存在していたということであった。これは、建物が、今も昔も変わらず、「人の命を守る」重要な役割を果たしているからである。特に我が国では、度重なる地震災害を経験し、そこから被害状況を学び、建築構造技術が発展してきた。講義では、過去の被害状況について丁寧な解説が行われ、私は「自然発生的な構造実験」という言葉がとても印象に残った。講義を受ける中で、地震により損傷した構造体を目の当たりにした構造技術者が、その原因を考え、再発を防止するために新たな技術を生み出してきたことを感じられたからである。現在、我が国で定められている建築基準法は、過去の地震被害から建物全体の崩壊形や柱・梁などの部材の損傷状況を把握し、新しい技術や考え方を取り入れることで改定が行われている。この成果として、東北地方太平洋沖地震(2011年)や熊本地震(2017年)などの震度7クラスの大地震時に新基準により建設された建物の被害が少なかったことが挙げられ、過去から学んだ技術や考え方が活かされていることを大変よく理解することができた。

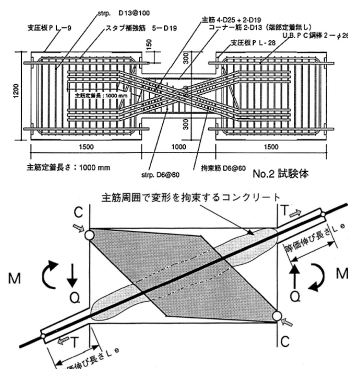
2. 構造技術者の役割について

次に、現代の構造技術者の役割と責任について述べられた。建築の構造分野における研究手法は、実験と解析の2つに大別される。最近では、コンピュータの発展に

伴い数値解析ソフトも大きく進化しており、誰でも簡単に構造計算を行える環境が整っている。解析による研究は、実験と比べて場所を選ばず、短時間で行えることや、一度モデルを組んでしまえば、条件などを変更した検討解析を行いやすいというメリットがある。しかし、このように簡単に構造計算が行えるようになったことで、新たな問題も浮上した。解析ソフトは手順を間違えなければ、コンピュータが自動で計算を行うため、誤った数値を入力しても答えが出力されてしまうのである。そのため使用者には、導き出された答えが妥当であるか否かを判断する能力が求められる。答えを導き出しても信頼性がなければ意味がない。そこで必要になるのが構造技術者である。答えが妥当であるか否かの判断は構造分野に携わってきた人でなければ難しい。ここで判断を誤ると、竣工後に不具合が生じて大きな問題となる可能性が高いのである。講義を通じて、構造技術者の役割とは、計算により導き出された答えに対して十分な考察を行い適切な判断を下すことにあり、社会的に大きな責任を負っているということを改めて実感できた。私自身も日頃の研究で解析ソフトを使用しており、共通点のある話題で大変勉強になった。基本的な使い方を覚えればソフトを使うことは容易である。しかし、モデルの構築や結果を判断するためには、構造力学や応用力学を理解しているだけでなく、材料学に関する知識や構造種別に応じた耐力評価式の使い分けなど、構造・材料に関する広範囲にわたる勉強が必要であり、だれでも簡単に行えるものではないことは日々感じているところである。

3. 講義を受けて

私は将来、構造設計の仕事に携わりたいと考えている。講義を受けて、構造技術者に必要な能力、役割および論理観について改めて深く考えるきっかけとなり、非常に有意義な時間を過ごすことができた。今後、残りの大学院での時間を大切にし、将来に繋がる努力を怠らないよう過ごしていきたい。最後にこの場を借りて講演いただいた小林淳先生に御礼申し上げます。ありがとうございました。



資料の一コマ(極短梁の開発)



積極的に質疑応答に参加する学生



講義後の質疑に対応する小林先生

ネットワークOB & OG ②

ある建築家の言葉

藤谷 英孝

略 歴

1997年 日本大学工学部建築学科 卒業
 1999年 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修了
 建築設計事務所を経て、藤谷英孝アトリエ 主宰
 2013年 千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻 修了
 2018年 足利大学 専任講師

一升瓶に半分残った日本酒に対して、「もう半分になっちゃった」と嘆くか、「まだ半分も残っている」と考えるか、同じ状況でも、その人の心の持ち方により大きく異なるという。大学院を修了してから20年近くを経て、後20年働けるとすると、今が半分なのかなと思うことがある。そのような時、工学部建築学科の『創建』に執筆することになったが、活躍と言えるほど目覚しい活動はしていない。ただ、人生の折り返し点で、自分のこれまでを顧みること、また、それが在校生にとっても参考になればと思い直して、筆を執ることにした。

工学部に入学したのは1993年で、地元の奈良から郡山に来たときは、東北はこんなに寒いものかと感じたが、不安感より、新生活に対する期待感の方が大きかった。その頃、建築学科は1学年約200名で東北・関東出身者が多かったが、全国から学生が集まっていたこともあり、方言による言葉の違いだけでなく、モノの捉え方、気質も異なるように感じた。このように、多様な人と接する機会を持てたことで、人との関係の幅が広がったようにも思う。その当時、先生にも印象的な方々がおられた。都市計画の三浦金作先生、歴史の谷川正巳先生、構造の倉田光春先生など、各先生から様々なことを学ぶことができた。特に、授業では建築計画の長沢悟先生が面白かった。長沢先生は学校建築がご専門で、使われ方研究という生活と空間との対応関係についても研究されていた。建築設計演習の授業で、「ある建築家は、私に住宅を設計させれば、その夫婦を離婚させてみせると言ったそうである」と話された。建築設計は、人の行動、人との関係も変えるほどの強い影響力があるので、丁寧に、課題に取り組みなさいという意味だったのだろう。

工学部在学中には、夏・春休みになると、旅をして、大学の外に出かけた。ロサンゼルスでの語学研修、ヴェネツィアでの調査、シカゴ、ピッツバーグでのフランク・ロイド・ライトの作品見学など、今でも、記憶に残っている。また、大学内の桜並木、飯豊連峰の新緑、小名浜の海、夜明けに見た磐梯山の紅葉、猪苗代の吹雪など、季節により移ろう東北の自然を身近に感じられたことは幸いであった。このように、大学時代は、授業で教わる工学知だけでなく、体験することで得られる経験知から、空間を捉えることが大切なのだと思う。

大学院修了後は、建築設計を中心に実務を経験した。そこでは、様々な与条件を読み込みながら、基本計画が完成した時や、自分が描いた図面が着工して実際に形になっていくプロセスが、仕事の面白みであった。ただ、集合住宅の設計業務では、コスト削減や、スケジュール管理が重要とされて、人が住む住宅をつくるという実感を持てなかった。また、建築が完成した竣工時点において、建築が評価されることにも疑問を持つようになった。それは、本来、建築が完成してからの生活、その空間で過ごす時間、その場から生まれる人と人との関係などが、建築の価値なのではないのかということである。

このような動機もあり、社会人として千葉大学大学院の博士課程に入学した。そこでの研究としては、30年前に調査された住宅地を対象として、再度調査することで、生活実態がどのように経年変化しているのかを調べた。その結果、空間のハードが与える人間への影響だけでなく、時間が経過することにより、そこに住む人も変わることや、維持管理手法などのソフトの仕組みも、大きく関わっていることが分かった。すなわち、環境が人間の心理に与える影響だけでなく、時間が経つことで、人間と環境がどのように関係するのかを研究したことになる。これは、人と空間が相互作用を及ぼしながら新しい状況に移行するという見方で、相互浸透論と呼ばれている。このような研究を今でも継続していることは、工学部の建築設計演習である建築家の言葉、建築環境決定論が起点となっているようにも感じる。

このように、大学時代は先生、言葉との出会いが大切なようだ。それだけでなく、旅における空間、書物などの出会いも大事なのだろう。ただ、このような出会いは偶然の要素である。それらとどのように関係を結ぶかについては、本人の意志によるところが大きい。つまり、その両方で、人生は決まるのではないだろうか。今後はこれまでの研究をまとめながら、建築から都市へと対象を拡げること、建築計画・設計の面白さを学生に伝えることなど、自分が定める目標のようなものは、年を重ねても増えてくる。そのため、「まだ半分も残っている」であろう人生で、活躍するよう自身に活を入れながら、最後に、工学部建築学科の先生、在校生、卒業生の皆様のご活躍を祈念するしだいである。



ヴェネツィア



ピッツバーグ



経年変化の研究（1980年・2010年）

学 生 の 活 躍 紹 介

日本建築家協会（JIA）主催第22回東北建築学生賞で、本学科4年次生の安東大毅さんの作品「身体を澄ます建築」が最優秀賞、4年次生の荒木千春さんの作品「まちを編む」が奨励賞（東北専門新聞連盟賞）を受賞されました。ここに記して祝すとともに、建築に対する考え方や受賞作品への思いを執筆してもらいました。

謝辞、そして私見としての設計

4年次生 安 東 大 毅

この度は、阿部直人先生をはじめ、多くの方々のご支援のお蔭で、第22回JIA東北建築学生賞審査会で貴重な経験をさせていただきましたこと、また、私の設計に貴重な紙面を割いて下さいましたことに、心より御礼申し上げます。僥越ながら、今回の設計とそこに至る背景について、一言述べさせていただきます。

私は、本学入学以来、日本建築学会主催のワークショップをはじめ、建築分野の内外を問わず様々な活動に、雑食的に参加してきました。これは、私の生来の臆病さとそこから生まれる不安を払拭するためのものだったのではないかと、振り返って今感じています。

そして、そのような活動への参加は、確実に私の設計観に変革をもたらしてくれたように思います。それは例えば、建築について考える際、建築という分野にどっぷり浸って考えるのではなく、建築特有のアナログな思考は残しつつ、そこに多角的で雑多な視点や解釈を加えること、自分の設計から可能な限り恣意的な表現を除くことに努めることといった部分に表れています。

それらは今回の設計でも同様です。「フクシマを考える建築」。この課題では、震災以降、全世界中に広まったフクシマという土地が抱える問題を建築的な操作によってどのように捌くかが求められたと感じました。

それに対して私は、自分で考え得る雑多な解釈をパッ

チーワーク的に繋ぎ合わせ、実際には建つことはないだろう「紙上建築」を手法に選び、アーキグラムのプロジェクトに想を得た「移動する建築」と、その自壊とともに堤防上に建設される「移植する建築」の、2つの建築の提案へと至りました。そこで私が描こうとしたのは、放射能汚染被害を受け、今では南相馬市に住もう方々の、故郷を想う郷愁と新たな生活景との間に確実にあるジレンマ、その両者の調停のための「あったかもしれない新たな水景」の創出を移動する建築を用いて試み、今後は住民が主役となって被災地を再構築していくという物語でした。従ってこの設計は、官主導で画一的で大規模に行われる復興に対する一種の皮肉でもあります。

この設計を通して私は、建築を考え、設計する上で大切なのは、土地や需要を無視した恣意的なプログラムやプロポーシオンの提案に狂奔することではなく、住民や土地が持つ想いの本質をきちんと理解するための努力を惜しまないことだと感じました。そして、建築には、それらを踏まえて設計を練るというアナログな強さがあることも痛感しました。

建築を学ぶ者として、今後も常に自身の設計観を疑い、考え続けながら、設計に取り組んでいくつもりです。



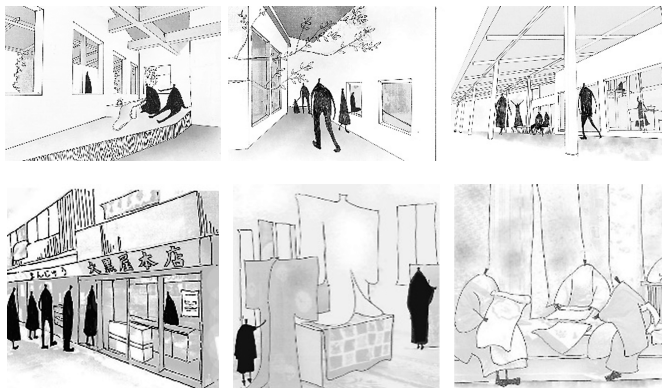
設計課題への等身大の解答

4年次生 荒 木 千 春

私達のスタジオの課題は「地域を元気にする建築」というものでした。その課題に対し、より賑わいのある温泉街への再生に取り組むべく、群馬県の渋川市にある石段街で有名な伊香保温泉を敷地に選定しました。この地域は、観光地として賑わう一本の石段道に対して、歩道を外れると空き家が建ち並ぶ閑散とした路地という異なる景色をもっています。そこで、今は単なる移動空間となっている3本の路地の一角に和裁士の工房を空き地・空き家を活かしてつくり、時間をかけてゆっくりと路地ならではの景色をつくり、地域文化・日常生活・観光資源が同時に交じり合い、地域に新たな魅力をつくり出す提案をしました。

渡邊宏先生とのエスキスでは、例えば、地域における路地の役割を読み解いた上で、路地空間での人の行動の

仕掛けとなる空間づくりなど、人の意識や行動と建築空間との関係を考えること出発点としました。細かい人々の行動や暮らしに目を向け、人に寄り添った小さくても質の高い建築こそが、より大きく地域を変える契機になる、といった視点を作品を通して表現しようと心がけました。



現場見学報告

日大東北高校新校舎建設工事を見学して

大学院博士前期課程1年 桐 生 翔 太

現在、日大東北高校では新校舎の建設工事が行われています。折角の機会でもあり、現場所長の方が快くお許し下さったこともあって、10月25日(木)、大学院の千葉先生の講義を受講している大学院生と構造系の先生方数名で現場見学に行くことになりました。つまり、今回の見学は、前回『創建』7月号に寄稿した見学に続くもので、再来年の竣工までに何度か行われる見学の一環で行われたものです。

前回も参加した私は、この約4ヶ月で工事がどれだけ進んだのか非常に楽しみにしていました。見学当日、ゲートを潜り現場に入ると、大量の資材やクレーンの奥に仮設足場に囲われた構造物が見えました。前は杭工事の最中だったこともあって、開けた土地に杭打機や打ち込まれる杭があるだけでしたので、構造物が建ち上がっている光景に早くも感動を覚えました。普段の授業では、それぞれの工程を取り上げた説明に留まるため、各工程が一つ一つ独立した工事のように感じてしまうことがありました。しかし、直接目にすることで、「あの時の杭の上にこの構造物が建っているのだ」と建設工事の流れを強く感じるようになりました。これは、同じ現場を何度も見学することの大きな利点でしょう。

次に目に付いたのは途中までコンクリートが打設され、その断面から鉄筋が伸びている基礎梁でした。この工事は、クレーンによる資材運搬の都合から3工区に分けられています。そのために、同じ基礎梁でも、前の工区の部分ではコンクリートが打たれ、あとの工区では基礎梁を継いでいくための鉄筋が組まれ、その先端には安全のためのキャップが取り付けられた状態を目にすることになったのです。他の様々な現場見学の折りに、配筋された基礎梁や基礎スラブは見たことがありますが、その多くは既に配筋が済み、型枠が組まれたものを上から覗くものでしたので、こうした状態の基礎梁を、しかもその断面を正面から見るのは初めての経験でした。

1階内部に入っていくと、階段の型枠が左右の壁と接するはずの箇所に、授業では見たことのない部材を見つけました。それは部材間の縁を切るためのスリット材で、柱と腰壁の間などにも付けられていました。また階段の下には小型のすべり支承なども設けられており、ふと、学部4年前期の建築構造設計の授業で、階段の荷重をど

の部材で支持するのかを真剣に考えたことを思い出しました。その時は、上下階の梁に持たせるのか、左右の壁は構造体とするのかで散々悩んだ階段の構造も、実際には様々な技術が凝らされ、想像もしていなかった解決策が採られることもあるのだと非常に驚かされました。

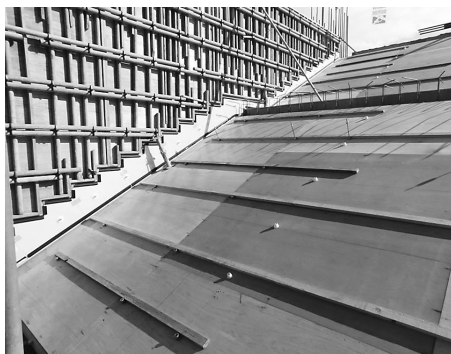
次に仮設階段で2階に上ると、床スラブ下端の型枠が組まれていました。そこには、あとで梁を落とし込むための溝が等間隔に設けられ、それが何列にもわたって並ぶ様子は、一瞬自分が建物のどの部分にいるのか分からなくなるほどでした。その周囲には、フープ用をはじめとする鉄筋の束が大量に運び込まれ、今後の作業の膨大さを窺い知ることができました。

ここで、それらの鉄筋の種類や配筋の計画についてご説明下さるとともに、質問にも答えていただきましたが、百聞は一見に如かずという言葉があるように、授業の中で聞くだけでは理解が覚束ないものもあります。ここでは「落としセバ」や「埋め殺し鋼製型枠」など、たくさんの部品や構法を、実物を見せながら説明していただきました。また、今回案内をして下さった施工監督の方が冗談めかして、「こんな構法を用いるのは初めてですよ」とおっしゃるほど、先進的で高度な構法が採用されているそうです。次回の見学でも、私が知らない構法や技術を見ることができるかと思うと、次の機会がより一層待ち遠しくなりました。

このように多くを学んだ今回の見学の途中で、施工監督の方が、「明日から面白い工事が始まるんですよ」とおっしゃる場面がありました。「なら、この次の機会には是非」と気軽にお願いをしてしまいましたが、通常の見学では「この次」はそう簡単には訪れません。さらにこの現場は、千葉先生の研究室のOBであった前現場所長のご厚意から、面白い工事が始まるたびにご連絡をいただける約束になっています。施工監督の方から見て面白いと感じる工事をその都度見学することは、他では決してできないでしょう。この貴重な機会を与えて下さった千葉先生と現場所長、案内を引き受けて下さった施工監督の皆様にご感謝しつつ、今後もより実践的で活きた知識を大学院で身に付けて行きたいと思っています。



現場入口と基礎梁断面



階段型枠とスリット材



階段のスリット材

学 生 の 課 外 活 動 報 告

建築施工Ⅰ 現場見学会報告

平成30年8月7日、建築施工Ⅰ受講者を対象とした現場見学会が郡山市内で開催され51名が参加した。猛暑が続いていたため熱中症などの心配をしていたが、台風襲来の予報もあり、あまり気温が上がらず比較的現場見学に適した天候であった。例年とは異なり小規模な現場であったが、小規模だからこそ検討すべき多くの工程上の工夫点を学ぶことができた。今回は基礎工事の段階で、鉄筋工事や型枠工事までの進捗状況を実際に見ることができ、学生たちは授業で学んだ知識を現場で確認する良い機会となった。以下に参加学生からの感想を記す（編集係が数名の感想をもとに執筆）。

現場で倉持先生から改めて説明を受けたことで、施工の授業で学んだことがより具体的に自分の中で整理することができました。講義だけではイメージしきれなかった部分を、実際の現場を見学することでより深く理解できました。地下と1階の基礎部分の配筋及び型枠組立まで行われており、半分の打設作業は終了し、もう半分は打設待ちでしたので、状況を見比べることができ、大変

勉強になりました。また、説明時の名称がすぐには思い出せないことも多くあり、授業で学んだことを理解したつもりでしたが、まだまだ社会に出るには至らないことを痛感しました。

建物の図面だけではなく、仮設通路の計画や資材搬入時の交通整備計画など、トラブルが起こらないよう細かく計画立てをしていることに驚きました。現場では様々なところに細かな数字や印が書かれていました。このような作業は、コンクリート打設前に配管用の穴の位置やコンクリート打設するための目印であることがわかりました。一度コンクリートを打設してしまうと後から修正ができないことから、小さな作業であっても一つ一つ確実に手を抜くことなく行う必要性を感じました。

この現場は2名と新入社員2名の4名体制と伺い、少人数で現場監督を行っていることに驚きました。納期が決まっている中での仕事にもかかわらず、月に6日の休日を守られていると知り、スピーディーに仕事が行われていることを感じました。職人さんが気持ちよく仕事をしてもらうための環境づくりも大事な施工管理職の仕事と理解でき、コミュニケーションの重要性を再確認しました。新入社員の方が生き生きとしていて憧れました。

積水ハウス 関東夢工場 見学会報告

平成30年8月2日、建築学科を対象とした積水ハウス株式会社郡山支店主催、茨城県古河市にある関東夢工場見学会が開催され40名が参加した。片道2時間以上の遠方ではあったが、ショールームだけではなく、エコファースト企業としての取り組みや耐震性、実験住宅など、様々な展示が見られる施設であり、学生にとって多くの知見を得られる有意義な機会となった。以下に参加学生からの感想を記す（編集係が数名の感想をもとに執筆）。

業界初のエコ・ファースト企業に認定されており、環境保全に関する様々な取り組みを行っていることを知りました。エコ・ファーストパーク内では、資源循環センターを見学し、資源を無駄にしない住まいづくりを目指し、建築廃棄物を100%リサイクルしていることを学びました。80品目に分類する中でも、特に目を引いた職人による畳の解体作業の実演や、建物解体の際に排出された廃棄物を手作業で分別している様子を見学し、廃棄物の削減を実現させる努力を知り、建設するだけではなく、地球環境を守るための資源循環の重要性を感じました。

安震館では、制振と免震の違いを実物で体験しました。頭では理解していましたが、実際に体験するとその違いが明確にわかりました。免震では揺れが弱まるものの、それでも揺れることを知り、地震対策の難しさを感じました。すでに1万回以上も実験していると伺い、実験装置の耐震性にも驚きました。災害時に最低限必要な水を3日分蓄えられるストックシェルターの設置など、災害後も安心して生活できる工夫もあり、住宅防災はいつでも安心・安全・快適な暮らしの実現であると実感しました。

モデルハウスでは、書斎の位置が隠れ家のように入り組んだ先に配置されていたり、キッチンからリビングが見渡せるようにしてあったり、家事動線のコンパクト化を目指した工夫、家具配置を考慮した窓のデザインなど、細かい所まで住む人のことを考え尽くされていると思いました。自分の設計にも多くの点を参考としたいです。

実験住宅では、ネットワークでつながりテレビ画面で遠隔地との連絡も取れるシステムでありながら、住民同士の視線がさりげなく交される空間構成が提案された家は多くの学生から高い評価を得ていました。リビングの大きな窓から中庭を通じて書斎が見える関係性は、書斎から見ると視線が気になるとは思いましたが、実際に書斎の椅子に座ると安心感を抱きましたとの感想が多数みられました。良好な空間構成の事例が刺激となりました。

猛暑の中、日よけが少ない環境での見学会となりましたが、この見学会で学んだ、ものづくりの考え方・環境との共存姿勢などを、今後の設計活動を始め、あらゆる活動に生かしてほしいと期待しています。



第61回日本大学工学部学術研究発表会

日時：平成30年12月8日(土)

<建築学部会 第1会場：7033教室>

- ・水平力を受けるRC円筒型耐震壁の3次元FEM解析 ○荒井就英・堀川真之・浅里和茂・清水健次
- ・ファイバーモデルによる高層RC造建物のプッシュオーバー解析 ○黒田啓太・堀川真之・浅里和茂・清水健次
- ・SEMによるせん断変形を考慮したLevy-typeプレートの振動解析 ○桐生翔太・Buntara S. Gan
- ・下地の種類及び養生方法がポリマーセメントモルタルの接着強さに及ぼす影響 ○西田電・齋藤俊克・出村克宣・掛川勝

<建築学部会 第2会場：7034教室>

- ・「福島県教育会館」の設計過程に見る前川國男の設計組織観 ○速水清孝
- ・「逢瀬川取水場ポンプ室」の建築に関する研究 ○矢代悠・速水清孝
- ・白河の景観まちづくり協定に関する研究 —田町の景観と提灯まつり— ○川口拓海・市岡綾子
- ・小学生児童を対象とした景観学習に関する研究 —白河市内城下町地区における事例を通して— ○中村豪志・市岡綾子
- ・重度肢体不自由者の住環境に関する研究 —戸建住宅を改修した住まいにおける経年変化— ○山田義文
- ・福島県建築文化賞受賞作品の傾向 —正賞を対象として— ○桐井翼・浦部智義
- ・地域交流施設計画時のワークショップの有効性 —葛尾村復興交流館の計画と運営に関する研究— ○作山和輝・浦部智義・芳賀沼整・滑田崇志・伊藤和輝
- ・東北6県に現存する地歌舞伎の公演時の実態調査 —東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間と役割についての研究— ○武田健大・浦部智義・渡邊洋一・藤野純也
- ・福島県における応急仮設住宅の再利用の実態 —木造丸太組工法で建設された仮設団地を対象として— ○渡部昌治・浦部智義・芳賀沼整・滑田崇志・早川真介・高木義典
- ・黄表紙第262号および273号の批判、討論（質疑）文言の疑問 ○浦憲親（日大工・校友）
- ・歴史的大規模木造宿泊施設を対象とした火災安全性の研究 ○栗原操生・森山修治
- ・高齢者施設の籠城区画による水平避難有効検証に関する研究 —アンケート調査の結果報告— ○諸岡志織・森山修治
- ・風車翼の空力騒音発生メカニズムに関する実験的研究 ○長島久敏・濱田幸雄・川端浩和・小垣哲也
- ・多目的ホールの音響特性及び設計手法に関する研究 ○最上依理加・濱田幸雄

大 学 院 生 の 活 躍 紹 介

大学院博士前期課程2年次生西田電君（出村・齋藤研究室）は、コンクリート工学年次大会2018（神戸）で発表した審査論文が高い評価を得ました。ここにその功績を讃えとともに、その充実した大学院生活を執筆いただきました。

大学院生としての研究を進めながら、その研究成果を論文として投稿及び学会発表しながら、卒業研究生の実験の指導にもあたっています。これらのことは、大学院修了後に向けての自己研鑽につながり、やるべきことが多く大変な日々ですが、大学院に進学してから学ぶことはとても多く、有意義な大学院生活を送っています。

卒業研究や修士論文の研究テーマは、新しい建築材料の開発や性能評価法の確立などで、これまでにない研究成果を求めていくことや、学会発表、学外での実験などで日本各地を訪問する機会があることは大学院での研究活動の醍醐味だと思います。卒研生の時は先輩院生の指示通りに作業をこなす立場でしたが、今は大学院生として、卒研生をサポートする立場となったので、責任を持って卒研を指導することにやりがいを感じています。又、修論の研究テーマは日本工業規格（JIS）の改訂に寄与するものなので、研究遂行の励みになっています。

研究室の特徴の一つは、研究者・技術者として活躍しているOBや理工学部と生産工学部の材料系研究室の先生方や大学院生との交流が活発なこと、企業との共同研究が行われていることです。様々な方々との交流を通じて、知識が広がり、社会人としてのマナーを学ぶなどの機会が多く、貴重な経験を積んでいます。

研究室の大学院生は学会誌に論文投稿するのが慣習になっていて、私もこれまで6編の審査論文を投稿し採択されました。論文を作成して投稿、その後査読があり、採択、条件付採択又は不採択と判定され、条件付採択の

場合には指摘事項を再考して提出します。この過程で研究結果に対する洞察力や文章表現力が鍛えられます。

私の修士論文のテーマはポリマーセメントモルタルのJISに関連するもので、そのJISは本研究室の卒研・修論をベースとして1970年代に制定され、最近では、2016年に改正されました。しかし、改正作業の中で、他の関連JISとの整合性や、現場に即した試験方法の確立が求められましたが、その根拠データが少ないなどの問題が指摘されました。そこで、私の研究では、今後のJIS改正に向けて、ポリマーセメントモルタルの強さ性状、耐久性などの性能評価に関わる試験条件を種々変化させて試験し、得られる性能と試験方法の関係を明確にすることを目的としています。

最近の成果として、本創建の「記事」に記載の通り、今年7月に開催のコンクリート工学年次大会2018（神戸）で発表した論文「試験時の応力増加速度並びに供試体の形状および寸法がポリマーセメントモルタルの圧縮強さに及ぼす影響」が「査読で高い評価が得られた論文」に選定されました。対象論文559編のうち24編（全体の4%）が選ばれ、その筆頭著者は、企業又は研究機関の研究者11名、大学教員3名、学生10名でした。

大学院での研究活動の成果がこのような形で評価されたことを大変光栄に思います。ご指導いただいている出村克宣教授並びに齋藤俊克専任講師はもちろんのこと、研究室OBの共同著者掛川勝氏（太平洋マテリアル㈱）及び実験に携わった卒業研究生にお礼申し上げます。

学 会 発 表

* 届け出があった記事を掲載

■2018年日本建築学会大会

日時：平成30年9月4－6日 会場：東北大学災害国際研究所（仙台市）

- ・ポーラスコンクリートの圧縮強度に及ぼす型枠のせき板効果に関する一考察 ○齋藤俊克・出村克宣
- ・ポリマー混入率を調合因子とするポリマーセメントモルタルの耐久性に関する一考察 ○西田電・齋藤俊克・出村克宣
- ・沖縄県の沿岸部に25年間屋外暴露したRC構造物外装仕上げ模擬供試体の防せい性 ○岡田明也・阿知波政史・齋藤俊克・出村克宣
- ・梁断面の面外せん断変形を考慮したTimoshenko梁理論 その1 基礎式と f , Θf_{xy} , Θf_{zx} 及び回転 ϕ ○倉田光春・前島克朗・野内英治
- ・梁断面の面外せん断変形を考慮したTimoshenko梁理論 その2 ϕ 表示の基礎式とその一般解 ○前島克朗（五洋建設）・倉田光春・野内英治
- ・1質点系モデルにおける測定コードの影響に関する検討 ○渡邊拓哉・日比野巧・千葉正裕・浅里和茂
- ・歴史的価値を有する大規模木造宿泊施設の安全性能確保特別調査委員会の活動 その1：概要 ○新宮清志（日本大）・後藤治・花里利一・森山修治・鯉坂徹・長谷見雄二・尾谷恒治・河合直人・藤田香織・八木真爾
- ・ファイバーモデルによる初期応力を考慮した高強度鉄筋コンクリート柱の曲げ性能評価 その1 初期応力導入手法の概要 ○清水健次（開発設計コンサルタント）・荒井就英・黒田啓太・漆原秀明・堀川真之・浅里和茂・瀬下守・成瀬啓一
- ・ファイバーモデルによる初期応力を考慮した高強度鉄筋コンクリート柱の曲げ性能評価 その2 主筋の降伏強度が2方向曲げ性能に及ぼす影響 ○荒井就英・黒田啓太・漆原秀明・堀川真之・浅里和茂・清水健次・瀬下守・成瀬啓一
- ・ファイバーモデルによる初期応力を考慮した高強度鉄筋コンクリート柱の曲げ性能評価 その3 載荷軸力をパラメータとした検討解析 ○黒田啓太・荒井就英・漆原秀明・堀川真之・浅里和茂・清水健次・瀬下守・成瀬啓一
- ・中小規模高齢者居住施設に適した火災時人命安全計画手法の開発研究 ○森山修治・鍵屋浩司・河合邦治・長谷見雄二
- ・文化財建築を対象とした火災安全性の研究 歴史的な大規模木造宿泊施設を対象として ○栗原操生・森山修治
- ・実大規模の居室等における煙流動・排煙実験 その1 実験装置と実験の考え方 ○鍵屋浩司（建築研究所）・西野智研・鈴木淳一・森山修治・山口純一・仁井大策・高橋済・出口嘉一
- ・高齢者施設の籠城区画による水平避難有効検証に関する研究 災害時の対応および災害対策に関するアンケート調査結果 ○諸岡志織・森山修治
- ・条件判定による風車騒音の定量化解析 ○長島久敏・濱田幸雄
- ・地歌舞伎公演における観客の属性に関する研究 東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割についての研究 その7 ○武田健大・浦部智義・渡邊洋一
- ・福島県南会津郡に現存する大桃の舞台の活用に関する研究 東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割についての研究 その8 ○藤野純也・浦部智義・渡邊洋一・我妻佑磨・武田健大
- ・小学校における教室壁を利用した掲示に関する研究 木質壁とRC壁の教室の比較分析 ○伊藤和輝・浦部智義・宮崎渉・小田貴彦
- ・熊本地震における木造仮設住宅の再利用の可能性 ○武井碩毅・浦部智義・渡部昌治
- ・震災避難者における復興公営住宅への環境移行に関する研究 福島県白河市内の復興公営住宅への移行プロセス ○相田快・市岡綾子
- ・重度肢体不自由者の住環境に関する研究 戸建住宅を改修した住まいにおける経年変化 ○山田義文
- ・東日本大震災後の福島県における応急仮設住宅の時系列変化 4自治体の比較分析 ○久保田悠人・渡部昌治・浦部智義・芳賀沼整・滑田崇志
- ・福島県における建設型応急仮設住宅の再利用の現状 ログハウス型仮設住宅団地を中心に ○渡部昌治・久保田悠人・浦部智義・芳賀沼整・滑田崇志
- ・近世下総国古河村の大工 ○山岸吉弘
- ・第二次世界大戦後の建築士法案に対するGHQの評価 ○速水清孝
- ・津波災害時における外国人観光客の避難情報ニーズに関する調査研究 ー神奈川県鎌倉市を対象地としてー ○阿久津研介（若築建設）・山本和清・宮崎渉・狩野悠介
- ・プレジャーボート利用実態調査及び利用率向上に関する調査研究 ○福島功理（五洋建設）・山本和清・宮崎渉・狩野悠介

■日本造園学会東北支部第18回支部大会

日時：平成30年10月13－14日 会場：福西本店母屋蔵（会津若松市）

- ・公園内における簡易ポータブルスペースに関する実験的検討 ○川口拓海・市岡綾子
- ・白河市内における景観まちづくりと景観学習 ○岡部真純・守岡優希・市岡綾子

■第13回コロキウム構造形態の解析と創生2018

日時：平成30年10月18－19日 会場：建築会館ホール

- ・SEMを用いたせん断変形を考慮したLevy-typeプレートの振動解析 ○桐生翔太・長尾光雄・Buntara S. Gan

■International Multi-Conference Engineering and Technology Innovation 2018

日時：平成30年11月2－6日 会場：Taoyuan, Taiwan

- ・Free Vibration of a Levy-Type Solution for Plates Based on Two-Variable Refined Plate Theory by Using SEM ○Shota Kiryu, Sofia W. Alisjahbana, Irene Alisjahbana, Mitsuo Nagao and Buntara Sthenly Gan

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・山田義文, 「札幌市の高齢者生活支援ハウスにおける入居者ニーズと居住環境に関する研究」, 日本建築学会地域施設計画研究論文集, vol. 36, pp. 1-6, July. 2018
- ・宮崎渉・小田貴彦・浦部智義, 「公共施設の木質化に関する研究—小学校の教室空間に着目して—」, 日本建築学会地域施設計画研究論文集, vol. 36, pp. 93-98, July. 2018
- ・申銘規・浦部智義・小林拓也・宮崎渉・鈴木晃, 「中山間過疎地域における単独世帯員の居場所とその利用実態に関する研究」, 日本建築学会地域施設計画研究論文集, vol. 36, pp. 125-132, July. 2018
- ・宮崎渉・宮崎均・網倉雄二郎, 「温泉街における街並み形成と法規制に関する研究—群馬県伊香保温泉の宿泊施設を中心に—」, 日本建築学会地域施設計画研究論文集, vol. 36, pp. 213-218, July. 2018
- ・西田電・齋藤俊克・出村克宣・掛川勝, 「ポリマーセメントモルタルの接着強さに及ぼす下地の種類及び養生条件の影響」, コンクリート構造物の補修, 補強, アップグレード論文報告集, (第18回コンクリート構造物の補修, 補強, アップグレードシンポジウム) Vol. 18, pp. 707-710, Oct. 2018
- ・速水清孝, 「GHQ文書に見る第二次世界大戦後の建築士法の成立過程—建築士法の成立過程に関する研究 その7—」, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 83, No. 754, pp. 2391-2400, Dec. 2018

■齋藤専任講師は、月刊建築仕上技術 8 月号の巻頭言に、『「ロハスの工学」と研究課題』と題して寄稿された。

■8 月 2 日, 積水ハウス株式会社郡山支店主催の本学科学学生対象とする「関東住まいの夢工場見学会」に 40 名が参加した。

■8 月 8 日, 建築施工 I の授業の一環として, S 郡山ビル建替工事現場見学会が開催され, 3 年次生 51 名が参加した。

■廣田教授は, 8 月 20 日, 郡山市より, 郡山市建築審査会委員を委嘱され, 会長に選出された。

■廣田教授は, 8 月 27 日, 西郷村より, 西郷村空家対策計画策定支援業務プロポーザル審査選考委員を委嘱され, 委員長に選出された。

■浅里教授は, 福島県建築安全機構が主催する「高校生が参加する地域防災授業」の一環として「地震のメカニズム」と題する講義を, 8 月 27 日に福島工業高等学校, 10 月 22 日に郡山北工業高等学校で行った。

■浦部教授らの縦ログ構法研究会は, 2018 年 9 月に建築資料研究社から『縦ログ構法の世界—森・まち・産業を支える新しい建築のつくり方』を出版した。

■速水教授は, 「プロフェッサー・アーキテクトと研究と設計 (特集 再び手を結ぶ, 研究と設計)」と題する論文を『建築雑誌』9 月号に寄稿された。

■渡部特任教授は, 9 月 5 日, 日本建築学会大会記念シンポジウム「祈りを包む建築のかたち—福島・世界を念いながら—」に, パネリストとして登壇された。

■市岡専任講師は, 9 月 7 日・12 日, 10 月 6 日, 白河市より景観学習事業の講師を依頼された。また, 市岡研究室と速水研究室の学生有志が児童の学習支援を行った。

■市岡専任講師と市岡研究室は, 9 月 15-16 日, 須賀川市翠ヶ丘公園で開催された G O TORCH イベント (合同会社 U G O 主催) に開催協力を行った。

■森山教授は, 9 月 18 日, 国土交通省住宅局建築指導課より, 防災拠点等となる既存建築物に係る機能継続ガイドライン検討委員会委員を委嘱された。

■9 月 21 日に開催された郡山市都市計画課主催「リノベーションまちづくり勉強会」に, 岡部真純さん (市岡研・4 年), 河井優貴君 (浅里・堀川研・4 年), 鈴木拓磨君 (廣田研・3 年) が参加した (p 3 参照)。

■山田専任講師は, 日本肢体不自由児協会

機関紙「はげみ」平成 30 年 10-11 月号に『バリアフリー・ユニバーサルデザインの今』と題して寄稿された。

■濱田教授は, 10 月 1 日, 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構より N E D O 技術委員を委嘱された。合わせて, 「風力発電等技術研究開発/②風力発電高度実用化研究開発」研究評価委員会 (分科会) 委員に指名された。

■西田電君 (出村研・M 2) がコンクリート工学年次大会 2018 (神戸) で発表した論文「試験時の応力増加速度並びに供試体形状および寸法がポリマーセメントモルタルの圧縮強さに及ぼす影響」は, コンクリート工学誌 10 月号において, 査読で高い評価が得られた論文 (採択論文 559 編中の 24 編) の一つとして評価された (p 10 参照)。

■市岡専任講師と住環境計画研究室は, 10・11 月の毎週火曜・土曜日, 須賀川市翠ヶ丘公園内の憩の広場周辺を会場に, 社会実験として「Book Garden」を開催した。

教室ニュース

■廣田教授は, 10 月 3 日, 西郷村より, 道の駅基本計画策定業務委託に関する公募型プロポーザル審査委員会委員を委嘱され, 委員長に選出された。

■市岡専任講師は, 10 月 5 日, 浪江町より, 浪江町震災遺構検討委員会委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 10 月 13-14 日に開催された日本造園学会東北支部第 18 回大会において実行委員長を務め, パネルディスカッションのコーディネーターを務めた。また, ポスターセッションにて, 岡部真純さん (市岡研・4 年) が優秀学生賞を受賞し表彰された。

■廣田教授は, 10 月 15 日, 福島県より, 福島県土地収用事業認定審議会委員を委嘱され, 会長に選出された。

■齋藤専任講師は, 10 月 18 日, 日本材料学会コンクリート工事用樹脂部門委員会第 193 回定例会において, 「ポリマーセメントモルタルの各種特性とその試験方法に関する検討」と題して講演された。

■10 月 20 日, 日本建築家協会 (J I A) 主催第 22 回東北建築学生賞で, 15 校 16 学科応募総数 40 作品中, 安東大毅君 (速水研・4

年) の作品が最優秀賞, 荒木千春さん (浦部研・4 年) の作品が奨励賞 (東北専門新聞連盟賞) を受賞された (p 7 参照)。

■市岡専任講師は, 10 月 24 日, 国土交通省東北地方整備局より, 福島県における復興祈念公園基本設計検討調査有識者委員会委員を委嘱された。

■速水教授と建築歴史意匠研究室は, 「ランタンハウス」を製作し, 10 月 27-28 日開催の北桜祭に展示された。

■渡部特任教授と市岡専任講師は, 10 月 29 日, 国土交通省東北地方整備局より, 福島県における復興祈念公園基本設計空間デザインワーキング委員を委嘱された。

■浦部教授は, 10 月 30 日, 郡山市より, 郡山駅前広場利活用懇談会の委員に委嘱された。

■浦部教授と浦部研究室は, 10 月 30 日, N P O 法人福島住まい・まちづくりネットワークが企画発行した『地図集制作活動 [福島アトラス—原発事故避難 12 市町村の復興を考えるための地図集制作活動—]』で, 2018 年度グッドデザイン賞, 賞ベスト 100, 同特別賞: グッドフォーカス賞 [復興デザイン] (日本デザイン振興会会長賞) を受賞した。

■市岡専任講師は, 10 月 31 日, 国土交通省東北地方整備局主催の震災伝承シンポジウム「何を残し, 何を伝えるか」に, パネリストとして登壇された。

■野口樹君 (浦部研・3 年) は, 三協アルミ主催「未来のとびらコンテスト (大学生版) 第 4 回学生建築デザインコンペ 2018」において, 一次審査通過者 7 名に選ばれた。

■市岡専任講師は, 11 月 1 日, 須賀川市より, 須賀川市都市計画マスタープラン改定委員会委員を委嘱された。

■浦部教授は, 11 月 1 日, 校門建築会環境技術懇談会において「福島における活動から復興を考える」と題して講演を行った。

■浦部教授は, 11 月 14 日, 『縦ログ構法の展開—ロハスの平屋—』で第 30 回栃木県マロニエ建築優良賞を建築主として受賞した。

■森山教授は, 11 月 16 日, 公益社団法人日本火災学会主催の火災科学セミナー「近年の社会動向と技術進歩を踏まえた火災対策」において「飲食店の火災低減に向けた課題と解決策」と題して講演された。

■廣田教授は, 11 月 26 日, 郡山市より, 郡山市空家等対策審議会委員を委嘱され, 会長に選出された。